

# アメリカ文学に見る個の成熟

川崎医療短期大学 一般教養

安井 信子

(平成10年9月30日受理)

The Maturity of the Individual in American Literature

Nobuko YASUI

Department of General Education

Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki, 701-0194, Japan

(Received on September 30, 1998)

## 概要

十九世紀のアメリカでは、自分の力で道を切り開く、無限性をもつ個人というイメージが台頭したが、その背景には荒野、野性の自然があった。例えば生涯自然に親しんだソローは、社会の固定観念から自由な徹底した個人主義を主張、実践し、世界と心の内部における野性をどこまでも求めた。キャザーとヘミングウェイも幼時から野性的自然を体験したが、彼らに共通するのは勝利追求と「克己」、即ち強者の精神である。しかし常に対象と競い勝利することでの生の証しを得る生き方は競争型共依存症であって、真に成熟した個人の在り方ではない。彼らは力と若さを求めざるを得ず、豊かな老い方を知らない。二十世紀半ば、アルコホリクス・アノニマスの提唱した「自己の無力を認め、

自分より偉大な何かに自己を委ねる」という考え方が広まってきた。「自分も他人もいのちは同じ。深いところで繋がっており、一体である」という生き方を、ヘロウは小説で、B・ウィルソンは非暴力平和運動の人生で表現している。日本の個の成熟は、アメリカに追随するのではなく、いったんは個を確立しつつ、他者との関係に鋭敏な、一体性志向があることを生かして初めて達成されるであろう。

## Abstract

In the nineteenth century in America prevailed the image of the individual who struggled his own way with infinite possibility. It had the wilderness or wild nature for its background. Thoreau, who enjoyed intimacy with nature all his life, advocated and practised the thorough individualism free from conventionalism, without ceasing to quest for wildness in his inner and outer world. Cather and Hemingway, who both experienced wild nature in their childhood, had one thing in common: the pursuit of victory, self-control, namely strength. However, those who need to be convinced of the meaning of life by competing with and defeating someone or something are suffering from 'competitive codependency'. Those, who are not truly matured, are attached to youth and energy, and do not know how to grow old in ripeness.

In the middle of the twentieth century, 'Alcoholics Anonymous' proposed the concept that one could admit his powerlessness, trust and submit oneself to something greater than oneself, which gradually began to spread in the world. This is the opposite to the image of the strong, infinite individual. What it tells us is, "I and others are the same at the root of life. We are one, being connected with one another in depth." S. Bellow expresses it in his novels, B. Willson through his nonviolent

peace movement. They know that an individual can obtain peace of mind, the real infinity, only when he admits his powerlessness and perceives oneness of humans. As for the Japanese, they do not need to follow in American footsteps. Although they are suffering from 'obliging-accepting co-dependency' and have to establish the independence of the individual, they should make good use of their cultural characteristic, that is, their radical sensitivity to oneness of all living things.

### 一、個人と不安

最近あるセミナーで「今自分にとつての問題は何か」という問いかけに、皆が自由に話しあったところ、多くの人の関心が次のような発言に集中した。「周りの人とい関係になるにはどうしたらよいか」「配偶者、親、子供とちゃんと向き合いたい」「周囲を心配し過ぎて振り回される」「自分が本当に何をやりたのかわからない」「いろいろやっても、つまるところ何をやっているんだらう」という不安、不全感がある」などである。これは一つには周りとの人間関係の問題であり、もう一つは本当の自己とは何かという問題であつて、日本の種類のセミナーでよく見られる反応である。その後で、「不安であつていい。不安から自覚が生じ、人とのつながりができ、自分の世界が広がっていく」と、不安を積極的な観点から見ると、参加者の集中度が俄然高まった。つまり、自己と人間関係について不安をもつ人が現在非常に多いということだ。

この不安は、特に子供や若い人たちにはつきりと現れている。例え

ば、不登校、いじめ、自殺、薬物摂取、過食・拒食症、引きこもり、さらには殺人まで。こういう現象は大人たちへの抗議だと見る人々も多いが、少なくともそれが子供達の、日本社会への反応であることは確かだろう。「いい学校」「いい就職」を目指す画一的な価値観が浸透した社会で、生まれたときから受験競争にからめとられている子供達は、その中で「自分であること」を殆ど許されない。そのシステムから弾き出され、あるいは落ちこぼれるか、周りの無形の圧力に過剰適応するしかない。しかし一見うまく順応した、勉強のできる優等生にも、最近では「よい子の息切れ」と呼ばれる無気力症状が目立つ。

こうして大人になり、表面では社会に適応しながらも、人は心の奥で、本当は自分とは何だろうと戸惑い、自分がわからないゆえに対人関係に苦しみ、もしくははつきりと自覚はしていなくても、自分の在り方に漠とした不安を抱く。日本人のこの不安は、今、一個の人間として育ち、成熟し、人生をまっとうすることが困難であるという現状から来ている。この不安は、個として成熟するということはどういうことかという疑問を私たちに投げかける。私たちはもうそれを避けることができなない時点に来ている。それではまず、アメリカの場合を参照に、個とは何かということから見てみよう。

### 二、アメリカの個人

個人という概念は西洋から来ている。ルネサンスや宗教改革の頃から広まったとされる個人主義とは、個人を出発点及び目標とし、社会や集団の利益に優先させる見方である。ダーウィンの進化論も、個体

間の競争、つまり自然淘汰を基礎としており、個が出発点とされている。この進化論を、まず種に目を向けた今西錦司氏の棲み分け理論と比較すれば(今西)、その対照に驚かされるほどであり、個人主義は西洋の顕著な特徴といつて間違いない。その西洋から、さらに自由を求めて飛び出した人々が形成したアメリカ合衆国という国は、さらに個人主義的であり、個の確立度が高いと言われている。しかし建国の初めからそうだったわけではない。

周知のごとく一六二〇年、主として宗教的自由を求めてピルグリム・ファーザーズはプリマスにやってきた。皆が夢見た新天地は、上陸してみると全くなじみのない「荒涼とした恐ろしい荒野」であり、最初の冬に百人余のメンバーのうち半数が命を落としたほど苛酷な自然だった。これほどの厳しい環境では、個々人の自由など論外で、何よりも集団として生き延びることが当然優先される。「彼らは個人であるよりも前に、まず全体の秩序に厳しく帰一しなければならなかった」(酒本、四)のであり、神の掟と考えられたルールに背く者は厳罰に処せられ、もしくは追放、死刑によって排斥された。人々は自然の人情や押さえがたい感情も時として否定しなければならず、このピューリタニズムの抑圧性はアメリカ文化に根深い影響を残した。

しかしやがて共同体の生存が保証され、社会が強大になるにつれて、個人に対する見方も変わっていく。人々は発展の可能性を求めて、次々と未開の西部に進んで行った。白人には広大で手付かずの自然と見え、西部は、世界は無限の可能性をもち、人間はどこまでもそれを追及できるといふ世界観を可能にした。人間は教条主義に抑圧される個人

から、「無限性をもつ個人」(エマソン)、「目を真つすぐに内部に向ければ、心の内に未発見の地域が幾百となく見いだされるであろう」個人(ソロー)へと変貌していった。その限らない個人というイメージは、十九世紀のアメリカにおいて、ヨーロッパとは比較にならないほど顕著だった。移住から始まったアメリカには、長い歴史を経てでき、土地と人とが馴染み合った土着の共同体や文明がなかったため、その庇護もなかわり、伝統の圧迫もなかったからだ。その上人間に征服されていない、巨大な野性の自然は、人の心の内なる自由、無限性への欲求を呼び覚まし、人々は旧世界的社会通念から自らを解放しようとした。R・W・B・ルイスの言葉を借りると、当時のアメリカ人の自己イメージは、「歴史から解放された個人……一人で立ち、自らに頼り、自らの力で前進し、自分独自の生得の力により、何が待ち受けていようともこれに立ち向かう」人間だった。

興味深いことにアメリカ文学には孤児の主人公が多い。ヨーロッパに比較すればアメリカの状況は、家の中で手厚い保護、或いは重圧となる拘束を受ける子供より、そういうものがない孤児に似ている。その環境が苛酷な場合、孤児はただ生きのびるためだけに全力を尽くさざるをえない。しかしある程度恵まれた環境に置かれれば、親や世間に無自覚に刷り込まれる既成概念に捕らわれず、自由に生きることが学ぶチャンスを与えられ、その世界は格段に広がる。そしてアメリカの場合、その世界は歴史的共同体ではなく、フロンティアという自然の要素を色濃くもっていた。例えば『鹿殺し』のナッティ・バンポールの生きる世界は野性の森であり、『白鯨』のイシュメイルの場合は荒

海である。

子供の孤児を例に取ると、ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』では、オリヴァーはイギリスという伝統的社会の中で生きて行くことを学ぶが、マーク・トウェインの描くハックルベリー・フィンには、彼を教育し躰ようとする大人たちから、ミシシッピ河の自然の中に逃げ出して、筏の上で「自由で気楽な」暮らしを楽しむ。確かに自由ではあるだろうが、しかし気楽なときばかりではない。嵐や人の暴力に対してハックはどれほど恐れ、また戦わねばならなかったか。野性の自然の中では、外部の脅威から身を守ってくれる家も共同体もなく、自分一人の力で切り抜けなければならず、一步誤れば命を失う。だから主人公はいっそう切実に自己の拠り所、安住の場を希求する。アメリカの「個人」の特徴は、自分の自由を求める激しさとその状況の厳しさといえる。次に、身をもって「個」を探求し、その意義を伝えてくれた何人かのアメリカの作家を取り上げてみよう。

### 三、無限の個人——ソロー

一人の個人として生きることの意味を徹底して追及したのは、H・D・ソローである。しかも単に思想や観念ではなく、彼はそれを生活の中で実践した。一八四五年、マサチューセッツ州コンコードの町から一マイル半程離れたウォルデン湖の近くの森の中に、彼は自ら小さい小屋を建て、二年余り一人で暮らし、その経験を『ウォルデン』に書いた。「大部分のせいたくは、そしていわゆる人生の慰安物の多くは、人類の向上にとって不可欠でないのみならず、積極的な妨害物だ」

(W一四)として、彼はぎりぎりの必要物以外のものをすべて捨て、生活を単純化し、時代や文明の変化に左右されない「人間の本質的法則」を、生きる基盤を探求した。今日のために家を建て、明日のために墓を作り、「自らの道具の道具になってしまった」人間にとって、「最高の芸術作品は、この状態から自分自身を自由にしようとする闘いの表現だ」と彼は言う。ゴミやがらくたを一掃してさら地に種を蒔くように、物質的のみならず精神的、社会的がらくたのない「戸外」「大気の中」に身をおこうとしたのだ。

じっくりと腰を据えて、意見や偏見や伝統や妄想や外見のぬかるみと泥の中を……しっかりと足を踏み締めて進みながら……我々が「实在」と呼ぶ、根の座った堅い岩底に達し、これだ、まちがいない、と言おうではないか。(W九七—八)

この「堅い岩底」こそ個人の拠って立つところであり、町から離れた森の自然はこの「岩底」に通じるための、夾雑物のない世界であった。しかし、ソローのいう人間とは、常に一人生きる個人であり、平たく言えば単身の成人男性であったことは注目に値する。ウォルデンを訪れたとき、私は彼の小屋の原寸大の模造に入ってみたことがある。それは思いの外小さく、隠者の庵にも似て、女や子供を入れられる住まいではなかった。野田研一氏も、ソローの家がどこまでも「一人で生きる家」であることを指摘し、「この徹底した個人主義は、共感するにせよしないにせよ読者をたじろがせるものではないか。なぜならそ

れはやはりきわだつて限定された条件の下でしか起こりえない、しかも、本来決して持続的ではありえない不可能な夢であるからだ」(二二四)と述べている。だがその不可能な夢を、ソローが実際に生きてしまつたその実験性にこそ、多くの人が引き付けられるのではないだろうか。彼は既存社会の束縛から自分を解き放つて、自由な個人の可能性を限界まで探ろうとしたのだ。確かにこんな生き方は家族をもつ者にはやりにくい。「もしも君が、父母や兄弟を捨て、妻子や友人たちとも別れ、二度と会わない覚悟ができていれば……君はいつ散歩に出掛けるもいいのだ」とソローは言う。「散歩(sautering)」とはソローによれば、「聖地(Sainte Terre)探求」であり「土地喪失(sans terre)」であつて、「特定の故郷をもたず、しかもどこにいても安住しうること」である。こういう姿勢で彼は「一人でいることを愛し」、自然の中で自由な個人としてあることを味わい検討したのである。

彼が自らを解放しようとしたのは、社会の固定観念からばかりでない。人間に手なづけられ、馴れ合いになつた自然にも彼は捕らわれまいとした。「限らない地平線を背景にもつ」ことによつて、個人が無限であることを希求する彼は、観念化されない、ヒューマニズされない野性の自然を求め続けた。「我々は荒野の強壯薬を必要とする。すべてのものを探索し学び知ろうと熱心になると同時に、我々はすべてのものが神秘であり……陸地と海が無限に野性的で……計り知れないがゆえに、測量されずにあることを要求する」(W三二七—八)。こうしてソローはメイン州のクーターデン山に登り「広大で荒涼としていて、人を受け付けない自然」に出会つた。しかしその「純粹の自然」の中

で、個人とは何であるのか。

確かにこの自然は美しい。だが、どこか寂しく、恐ろしい。……これこそカオスと太古の闇からつくられた原初の大地だ。ここには人間の地はなく、あるのはまっさらの地球だけだ。……それは人が歩み、あるいは埋葬される「母なる大地」では決してなく……広大で恐ろしい物質そのものなのだ。……私は自分の身体を畏れをもつて見る。私を縛る個の物質は既に見知らぬ何物かだ。私は精神や靈魂を恐れない。それは私と一体だからだ。だが私は身体を恐れる。……我々は一体何者なのか、そしてどこにいるのか？(M九七)

かつてビルグリム・ファーザースの眼前に荒野があつたように、再びここに荒野がある。彼らが荒野に背を向けて人間社会を築こうとしたのに比して、ソローは固定化した人間圏から単身出て、野性の自然に直面しようとした。そしてそこに人間の居場所がないことを発見し、そればかりか自分の身体の「物質そのもの」にも畏怖を、異質性を感じたのだ。彼は人の住む共同体に身を置きながら、自然と親しみ研究を続け、最後まで「物質そのもの」に迫り「我々は一体何者なのか」問おうとした。彼が現代のエコロジーに大きな影響を与えたのは、そういう彼の個人が、人間中心主義から脱した大きな生命観の中にあつたからである。

四、勝利する個人——キャザーとヘミングウェイ

ソローに見られるように、野性の自然の中に個人を置いてみることはアメリカ文学の一つの特徴である。ソール・ペロウの言葉を借りると「アメリカ人は空 (emptiness) を背景として自分を定義する」のだ。

「空」とは人間化されたものが何もない、空っぽ (empty) の自然である。例えば一八八三年、八歳でネブラスカの辺境に移住したウイラ・キャザーも、「世界の果てを越えてしまい、人間の管轄圏外にあると感じた。……その大地と空の間で、私は拭い去られ抹殺されるように感じた」(七一八)という強烈な体験から出発した。その自然は彼女にとって、「世界の果てを越えて真つすぐ歩き続けたかった……もう少し行ったら太陽と空だけになり、人はその中に漂いこんでいくだろう」という無限性を備えていた。このように自然は圧倒的である一方、文化や芸術は希薄な片田舎で、彼女は偏見と闘いながら強い意志と情熱をもって個人の自己実現を達成し、都会に移って作家として成功を勝ち取った。しかしその最良の小説はフロンティアを背景とした力強い開拓者を描いたものだった。都会に住みながら彼女は常に「決して振り払うことのできない情熱でその草一面の土地に虜にされた」。「それは私の人生の幸福であり、呪いであつた」と彼女は言う。なぜなら荒野は「永遠の若さを、力を、どこまでも可能な精神的な成長を確信させてくれる」のに、人を受け付けず、現実には住めないからだ。その上二十世紀初頭には広大な自然は急速に消滅していき、齢とともにキャザーは個人の拠り所を求めて過去や宗教に目を向けていく。そして、野性の自然を背景にもとうとする人間は單身たらざるをえない

ともいうように、キャザーも終生独身だった。

「アメリカ及び個人としてのアメリカ人の栄光と悲惨を、最も如実に照射した作家」(大橋、一九三)といわれるヘミングウェイも、狩猟を好む父の影響で野性的な自然になじんで育った。しかし、彼にとつて「空 (emptiness)」の主たる背景となつたのは、第一次大戦で経験した「悲劇性を奪われたただの死」、つまり無意味な死であつた。彼によれば人間は人生を全うして往生するのではなく、無意味に「殺される」のだ。この無意味、虚無に対峙して個人はどう生きうるかという問題が、彼の作品の根底となつた。彼が出した答えとは、「人間は破滅させられる (destroyed) かもしれないが、打ち負かさず (defeated) はしない」(『老人と海』) という言葉である。「打ち負かされない」とは、いざれ「殺される」とわかっていても全力で自分にできるだけのことを正確におこなつて、乱れず耐えることだ。彼が好んで戦争や狩猟に赴いたのは、そのハードなストイシズムの美学を成立させるために「生と死の感情を与えてくれる明確な行動」が、いや、露骨に言えば、「暴力的な死」が必要だったからである。例えば「暴力的な死」が必然的に人か牛に降りかかる、闘牛の完璧なパフォーマンスは「己を自己の外に連れ出し、不死の感覚を味わわせ、宗教的法悦にも劣らぬほどの深い陶酔感を与える」(『午後の死』)と彼は言う。人々はそういう彼の姿勢を男らしきの極致と解したが、彼が求めたのは実はこの個人を抜ける体験、闘争と死を通じて自我融合する超個への試みであつた。

しかし、個の孤立から抜け出て他と一体化するために、殺しと死以

外に道はないのだろうか。『老人と海』の主人公は巨大な魚に話しかける。「わしはおまえほど大きくて穏やかで気高い奴を見たことがない。……さあ、わしを殺せ。どっちがどっちを殺そうとかまわない。」「これを愛しているなら、これを殺すのは罪ではない。……あらゆるものが何らかの仕方であらゆるものを殺しているのだ。」愛の表現さえ殺しの形をとらなければならぬのだろうか。殺しや闘争によって虚無から意味を勝ち取る生き方は、あくまで強さを必要とし、老いを許容しない。中島顕治氏はヘミングウェイのヒロイズムをネイティヴ・アメリカンの人生観と比較して、「成人儀礼から戦士へというプロセスだけで、『戦士から家族の長へあるいは人望篤い酋長へ、そこから孫に囲まれる好々爺へというプロセス』が欠けた『不自然で偏狭な生き方』(一七九)と述べている。

無限あるいは無を背景とし、家族や共同体が本質的に欠落している個人は、常に一人立つために「永遠の若さと力」を必要とする。ソロも自然の若々しさと朝を好み、例えば「その弾力のある力強い思いが太陽と歩調を共にする者にとっては、一日はいつまでも朝である」(W八九)と書いている。キャザーの作品にも、「平原の……はるか昔の最初の朝」(『ひばりの歌』)、「湖から太陽が昇り、そこで一日が始まった」(『教授の家』)、「ニューメキシコではラトゥールはいつも若者として目覚めた。……やわらかく野性的で自由な何かが……心を軽くし……幽閉された人の心を解き放つのだ。……朝の中へ、朝の中へ!」(『大司教に死は来る』)など、朝の言及は数知れない。野性と自由と朝について書かれたこれらの文は、はっとさせるほど伸びやかで爽や

かだ。しかし大抵の場合、このいつまでも若い個人は成熟から老いに向かう道をもたない。ヘミングウェイも虚無に「打ち負かされない」己が力を誇り、老いを拒み、老い衰えるより死を選んだ。あらゆる人間が通る成熟、老成、死という行程が、このように否定すべきものとされるのはおかしくはないだろうか。アメリカの個人はどうすれば順当に成熟し、老いることができるのか。

##### 五、委ねる個人

伝統的にアメリカ文学のヒーローには強い男が多いが、強さゆえに彼らは老い方を知らない。強者は破局が来るまで自らの無力さに気づかないからだ。その破局の一つにアルコール依存症がある。一九三五年、AA(アルコールリクス・アノニマス——アル中更生会)を発足させたビルとボブについて、斎藤学氏は『魂の家族を求めて』の中で次のように述べている。

二十世紀のアメリカ人ほどパワー(力)の論理を信じた人々はいなかったのではなからうか。……男は強くなければならない。筋肉も、頭も、風貌も衆に優れているべきだ。強い力で自然を切り開き、他者を屈服させ、女を従属させるものこそ、アメリカの大人の男であるというわけである。……ビル、ボブなどのアル中は、アメリカの最も強い部分(白人、中産階級、キリスト教)から出て、ここから脱落していった人々であった。そうした人々の中から、パワー信仰を狂気とみなす考え方が生じてきたわけである。(一四一五)

資産も名誉もある株屋だったビル即ちウイリアム・ウイルソンは、大恐慌で破産してアルコール依存症になり、医者からも見放され、絶望のどん底をくぐって、当時社会的自殺に等しかったカミングアウト(宣言)をし、AAという自助グループを作った。このAAには十二ステップの回復プログラムがあつて、それはまず、ありとあらゆる努力をしてもアルコールをやめられなかったという、自分の無力(パワーレス)を認めるところから始まり、自分が無力である以上、「自分自身より偉大な力を信じ、それに自分を委ねる」しかないことを理解するステップへ、さらにまだ苦しんでいる仲間への援助へと続く。自分一人ではどうにもならなかつたけれども、お互いに他人を必要としていることに気づいてそういう自分を受け入れると、回復に向かうことがわかつたのだ。AAのルールは、リーダーは支配しないこと、組織はあるべきでないこと、全員無名(アノニマス)であるべきで各個人よりもAAの原理が優先することなどである。これは十九世紀の「一人で立ち、自らに頼り、自らの力で前進する……限らない個人」と対極にある。一人立つ強者たちからなる社会の最強層においてこそ、苛烈な競争のストレスからアルコール依存者が続出したのだ。そして自分一人の無力を知り、他者とともに支え合っていくか、さもなければバラバラの個人として壊滅するしかないと確信したのだ。それはアメリカの個人の像が大きく変わり始めるときであった。ベイトソンによるとアルコール依存者は「自己」の捕らえ方に認識論的エラーがあるという。彼らは自己を周囲から切り離して周囲を対象化するように、自己の精神を対象化して、モノ化した自己を叱咤激励しコントロールしようとする。

対象とした周囲や自己に対して競争的關係をもち、負けまいとし、その戦いはエスカレートする一方なので、「酩酊して初めて……關係の中でやわらぐことができるのである」(四七)。これはアルコール依存者だけではなくそのままアメリカの多くの強者に当てはまる。ただ彼らはアルコール以外のもの——仕事、昇進、スポーツ、ギャンブルなどに酩酊してやわらぐという点が違うだけだ。酩酊しなければやわらげないほどに、常に競争して勝ち、相手をコントロールしなければ自分の存在感が得られないのは、「自己」の捕らえ方に「エラー」があるとしか考えられない。相手を自分に依存させることでコントロールしようとする人と、相手に頼ることでコントロールしようとする人との二者關係を共依存というが、アメリカの全人口の約九十六パーセントは共依存者だと言うデータもある(シェフ)。日本では庇護・依存のタテ關係によって殆どの人が共依存者であるのに比べ、アメリカではヨコ關係の熾烈な競争、闘争によって共依存者なのである。個の確立が強いといわれるアメリカは、この競争共依存症が顕著であるということにほかならず、競って勝とうとする自我の能動性のために個の強さが目立つのであつて、それは個の成熟を意味しない。

「パワーと他者コントロールによって成り立つ」現代社会の歪みと脆さが明らかになってきたとき、己の無力を認め、自己を委ね、ともに助け合うというAAの概念は全アメリカに、世界に広がっていった。一九六一年、ウイリアム・ウイルソンがC・G・ユングからもらった手紙によると、「アルコールへの渴望はある靈的な渇きの低い水準の表現」であり、「その渇きとはわれわれの存在の一体性(wholeness)に



対する渇きであり、中世風の言い方をすれば、神との一体化ということ」であった(三八)。それはバラバラの個人、他者を支配しようと互いに争う個人、「皮膚に閉じ込められた孤立したエゴ」(ワッツ)から抜け出る道を示唆した。「存在の一体性に対する渇き」とは人間の自然な欲求であり、ジョン・C・リリーによれば「人類の生存のために不可欠」である。オルダス・ハクスリーはこのことを「自己を超越した」という切望は、今も昔もかわりなく人間の魂のもつ基本的欲求のひとつだ」と表現している。個人一人がいかに強くても、闘争やヒロイックなストイシズムによっては全き(whole)自己に成熟できないことを、ドロップアウトしたものと強者たちは身をもって教えてくれた。ここにきてようやく人々はAAのいう自己の無力さを受け入れ、他の人とともにあることの意味を理解する段階に入る。二十世紀後半から、個を超えて支配・被支配でない人の繋がりに向かう動きが強まっていく。アメリカの個人は成熟し始めたのだ。

#### 六、個人と一体性

全米図書賞を受けたソール・ペロウの小説『ハーツォグ』(一九六四年)は、博覧強記、頭脳優秀な知的エリートを主人公としている。ハーツォグ教授は妻に離婚を言い渡され、友人に裏切られ、深刻な神経症に陥る。自我崩壊の様々な苦悩を経て、己の無力に直面させられた彼はついに、「人は自分自身のために幸福を必要とするのではなく……もし何か偉大なものが——彼をそしてあらゆる存在をそこに没入できる何かがあれば」耐えていけるものだ(二九六―七)と悟る。作品の

最後で彼はこれまでのことを回想しながら、「もし僕の頭がおかしいとしても、僕は大丈夫だ」と思うのだが、「頭がおかしい」というのは強者たる個人からみた場合の自分であり、「大丈夫」なのは「何か偉大なもの」に自己を委ね、支えられている自分である。それから十八年後に書かれた『学生部長の十二月』の結末では、天文台の開いたドームから空を見て、主人公は「生きている天空が自分を吸い込もうとする」かのように感じ、「石、樹、動物、男と女」も星々も自分も根底では一体だという確信に打たれる。孤立する個人から他と一体感をもつ個人へ向かう動きを、この主人公たちははっきりと表している。

このことを衝撃的な感動とともに私たちに伝えてくれるのは、『第三世界の脚で』(一九九二年、邦訳『レックス』)を著したブライアン・ウィルソンである。スポーツ万能で明るいごく普通の青年だった彼は、一九六九年、ベトナムの村で爆撃で死んだ母子を見て涙を流し、自分でも思いがけず、「この人は私の妹だった。この子たちも私の子供だった……」と呟く。それは「私の奥深い、知られざるところから湧いた言葉だった。「私は最も深い意味で生まれ変わったのだ……そこから私の長い償いの旅が始まったのである」(二九―四三)。彼は歴史、哲学を学び、アメリカが先住民や他の国々におこなってきたことを知って愕然とする。殺人、侵略戦争をおこなう政府に税金を払わないことを言明し、平和のために命をかけた非暴力運動を続ける彼は、「非暴力は自分の中の深いところにある。それは頭で判断して実行に移せるようなものではない。……非暴力とは……愛するために命をかけることである。もし愛することを学ばなければ、私たち自身が破滅する」

(六七)と言う。この「自分の中の深いところ」とは「頭で判断する」個人を超えたもの、その中では自分と他者は同じいのちである実感できるものである。

一九八七年カリフォルニアで、非暴力の座り込みによる武器運搬列車阻止をおこない、ウイルソンは機関車に轢かれ、奇跡的に命は助かったものの両脚を切断された。しかし、地雷で脚を失った多くの人に会って既に泣き尽くしていた彼は、自分の脚を失ったことでもはや泣くことはなく、「却ってこの世界の本質により深く触れるようになった」という。

もはや私は、たんに虐げられた人々と感情、知性、経験の面で親近感を分かち合うだけではなくなつた。……ベトナムのヒューやマイ・リー、ニカラグアで見た墓地へ向かう棺の中の母子、さらに合衆国の政策によって殺され、不具にされ、脅かされ、貧しさへ追いやられている世界中の無数の人々と、私はついに一体となつたのである。こうして私の脚は、本当の意味で第三世界の脚へと生まれ変わった。(二四五)

脚とは人が自ら立ち、歩く手段、いわば個確立、自立の象徴である。両脚のないウイルソンは自分だけでは立つことができない。第三世界の脚とは、互いに助け合わねば立っていけない弱者の脚である。彼の著書は「私たちはお互いが必要としている。私にはあなたが必要なのだ」という文で終わっている。義足をつけて歩くとき、それを作った

人たちが他の人達の支えを思い、自分が一人で生きているのではないことを感じるにちがいない。

私は一人で生きているのではない。  
天地万物の生命が支えてくださっている。

私は一人で生きているのではない。

多くの人々の恩恵によって無事過ごさせていただいている。

私が作ったものは何ひとつない。

地球、太陽、星々、空気、水、生物、鉱物等、すべて大いなる御方が用意して下さつたものだ。

私がこの世で使うもので、自分が作ったものは何ひとつない。

一切は他の人が働いてくださったおかげだ。

これほどの無上の喜びが他にあるであろうか。

今私は、尊くももつたない一瞬一瞬を生きている。

これは日本人の書いた詩の一部だが(尾崎)、ウイルソンの文章から伝わるものと深く共通するものがある。他者を、世界を、自分から切り離さず、人々の深い繋がりを体感するとき、閉塞的な個人から世界へ開かれるとき、それは無限性へと通じる。とすれば、個人は無限の背景を求めて単身荒野に赴く必要はない。おそらくアメリカは野性の自然を殆ど失って初めて自然の意味に気づき、孤立する個人の限界まで行って初めて世界との一体性を発見したのだ。成熟とは個を超えて一体性に至る道であった。

七、日本の個人

日本における個の成熟の問題は何だろうか。前述のように、アメリカの共依存が相手に勝つことで支配しようとする競争タイプであるのに比べ、日本ではしてやりしてもらおう庇護・依存タイプの共依存が圧倒的だ。例えば平井雷太氏は「日本の企業は自立した社員を、親は自立した子を、本当に育てたいのか。どこかで自立を望んでいないのではないか」と指摘する。日本が自立を阻むシステムになっているのは、社員(子)に自分を頼らせることで成り立つ会社(親)と、会社(親)に頼って生きる社員(子)の関係に見られるように、日本全体が共依存関係にあるからだ。斎藤孝氏は「共依存的人間関係は、私たちの社会では当たり前のこととして受け入れられている」と述べている。他国に比して日本に对人恐怖が際立って多いのも、「自己評価の基準が自分ではなく相手に、すなわち他者評価に全面的に依存している」という、共依存の一現象にほかならない。

アメリカには、評価基準を自己の内に内在化して、それによって自己主張しようとする傾向がある。アメリカの個人たちが野性の自然に踏み込んで、無限を背景として自己を定義しようとしたのも、社会通念に捕らわれず、人間の根底的基準を自分の中に捕らえたかったからだ。逆に、評価基準を自己の外部におく日本では他者評価を基準とするが、この他者とは一般に世間という曖昧で、相対的、不安定なものである。そのため常にスケープゴートを作り出して、それを攻撃、排除することで集団の安定を図っていく。それは停滞、閉塞であり、成長と成熟の拒否にすぎない。現在の日本人の不安、子供達のいじめや

不登校もここに根がある。しかし、アメリカの孤立する個人がその限界まで行き着いて、パワー信仰の誤りに気づき始めたように、個が癒着してトリモチ団子になりがちな日本のしがらみ社会も、そろそろその限界に近づき、転換点に差しかかっているのではないか。

中山治氏は著書『「ぼかし」の心理』において、精神活動のみならず生活のあらゆる面で、日本人が極めて頻繁に用いる「気」について考察し、それが日本人の心の特徴づける鍵概念であると主張している(五八)。「気」とは多義的で曖昧なもの、木村敏氏の言葉を借りると「一応は自分のものとして言われていながら、自分の自由にならぬもの、周囲の情勢次第でいろいろに変化するもの、その意味で『人と人との間』にあるもの」(二六八―九)である。西洋人の心の特徴づける概念がエリクソンのいうアイデンティティであることを考えると、西洋の個人の輪郭が明確であり、日本の個人が特徴的に自己と他者の境界がぼやけていることは当然といえよう。一般に「ぼかし」とは曖昧さ、逃避、論理的矛盾に対する鈍感さ、安易に流されやすい不安定など、否定的文脈で用いられることが多いが、一方では極めて重要な肯定的要素をもつことに注目する必要がある。日本人の肯定的「ぼかし」の心性とは、今ここにいる個人が、はるかに広く大きい何かと分かち難く繋がっているという、個人や組織を超越した普遍性にオープンである感性、つまり一体性への鋭敏さである。「以心伝心」や俳句の世界はそれなくしては成り立たない。それは言語(ロゴス)化できないゆえに、西欧論理に偏る現代では把握されにくく、肯定的な面まで否定的に捉えられてきた。しかし個の成熟にとって、これはいまこそ生かす

べき最適の資質ではあるまいか。

「氣」に基づくオープンな「ぼかし」の心性は、これまで保護・被保護の共依存、癒着的人間関係として日本社会にネガティブに作用してきたから、日本人はそこから抜けるプロセスとして、ひとまず自他の境界を明確にし、個人を獲得しなければならぬ。そのためには、自分が他者評価や固定的、画一的価値観に規定されなくても大丈夫だ、という安心感が必要であろう。「私は一人で生きているのではない」、「天地万物の生命」と「多くの人々の恩恵」が「私」を支えてくれているという安心が浸透していくにつれて、一体性志向という特性は、日本人の個の成熟を大きく飛躍させられると思われる。

## 文 献

- Bellow, Saul, *Herzog* 1964, Penguin Books, 1978  
Bellow, Saul, *Dean's December* 1982, Harper & Row  
Cather, Willa, *My Antonia* 1918, Hamish Hamilton, 1964  
Hemingway, Earnest, *Death in the Afternoon* 1937, Arrow Books, 1994  
Thoreau, D. H., *Walden* 1854, Princeton Univ. Press, 1973  
Thoreau, D. H., *The Maine Woods* 1864, Apollo Editions, 1966  
今西錦司『主体性の進化論』東京、中央公論社、一九八〇  
ウィルソン、B『レックス——平和への道はない、平和が道である』(仙田典子、島田啓介訳) 仙台、カタツムリ社、一九九三  
大橋健三郎他編『総説アメリカ文学史』東京、研究社、一九七五  
尾崎元海『にじのかけはし』兵庫、秋桜会出版部、一九九六  
木村 敏『人と人との間』東京、弘文堂、一九七二  
斎藤 学『魂の家族を求めて』日本評論社、一九九五  
酒本雅之『アメリカ・ルネッサンス序説』東京、研究社、一九六九

- シェフ、A・W『嗜癖する社会』(斎藤学訳)第五版 東京、誠信書房、一九九六  
中島顕治『ヘミングウェイの考え方と生き方』東京、弓書房、一九八三  
中山 治『「ぼかし」の心理』大阪、創元社、一九八九  
久守和子他編著『英米文学に見る家族像』ミネルヴァ書房、一九九七  
ワッツ、A『タプーの書』(竹淵智子訳) 東京、めぐるくまーる社、一九九一